

医心 伝心

小児医療の充実のもたらすもの

富山県医師会理事 金子 敏行

毎年、この時期に県医師会としての要望事項を「県政に対する要望書」としてまとめ、県に届けている。今年は、例年どおりの最優先事項である「継続的な医師確保対策」「女性医師支援」に引き続き、眼科医会で取り組んでいる「3歳児健診への屈折検査の導入」を重点項目として上位に記載してもらった。3歳児健診の視力検査は、現状では配布した視力表で、家庭で視力測定をしており、このやり方ではかなりの弱視児の見落としが出てみるとみられている。簡易な操作で測定できる新しい機器が出てきており、導入によって見落としがほぼなくなると期待されている。ただ、要望にある程度の理解をいただけたとしても、3歳児健診の実施主体は市町村であるので、実現までにはまだ紆余が予想される。良い方向に向かってほしいものである。

そのほかにも、今回の要望書には新生児聴覚スクリーニングへの公費補助、発達障がい児診療の講習への取り組み、小児在宅医療など小児医療に関する項目が多く盛り込まれている。

急速に少子高齢化が進み、2014年に発表された消滅可能性自治体という言葉が現実味を帯びて感じられるようになってきている。若年層が減っていくことで、税、社会保険の維持も、コミュニティの担い手としても、支えきれなくなることが危惧されている。単純に労働力不足を補うなら移民受け入れも一法ではあるだろうが、ふるさとの文

化の伝統を継いでいくためには、やはりそこで生まれ育った住民が中心でなければならないだろう。富山県の人口動態を見ると、ここ数年で出生率には若干の改善が見られるものの、その分母となる出産を担う年齢層が減少傾向であるため、出生数の増加にまでは結びついていない。子供の数について各家庭それぞれの考え方があるのはもちろんだが、事情が許せばもう一人子供が欲しい、という声がかかなりの割合であるという調査もある。小児医療の充実と、さらにそこに公的な資金投入がされて自己負担が減るならば、安心して子供を産み、育てる環境が整い、強力な少子化対策になると思われる。

富山県の社会動態で、若い女性が大幅に転出超過というデータもある。これを逆転し、むしろ子供を育てるために富山移住を考えるほどになってほしいと夢想する。仕事も、子育ても、富山が一番、と女性に選んでもらえる富山県を目指すために、小児医療のますますの充実に医師会として声を上げていきたいと思う。